

離島における福祉教育の開発

—新潟県粟島浦村を事例として—

呂 光暁

I. はじめに

時代の変化にもかかわらず、隔絶性の特徴を有する数多くの離島は、高齢化や過疎化が進み、生活基盤の脆弱性から福祉や教育に関する課題が自然に生まれてくる。離島におけるこれらの課題を解決するためには、福祉と教育という概念の本質的な意味までに遡って吟味することが避けて通れない。直井(2010)によれば、福祉の英語である welfare の原義は、「よい」「満足のいく」という意味の well と「暮らし」を意味する fare を合成したところから由来しており、「幸せな暮らし」であり「満足のいく状態」を意味するが、その概念は一義的に定義できるものではなく、社会の変化とともにその意味内容が変化していくものである。一番ヶ瀬(1987)は、「一時的に一瞬、人の心をよぎる感情である」幸福に対して、福祉は「人々の人生、さらに日常生活そのもののなかで、幸福であるための日常的な生活上の努力、そしてその結果としての状況をさす用語なのである」と説明した上で、実際に福祉は人類の歴史の発生のときから芽生え、社会的動物としての特質につらなる日常生活の努力として存在してきたと主張した。その論理的な根拠として、一番ヶ瀬(1987)は、幸福をめざす日常生活の努力は人間の「自立」を原則とするが、現実社会におけるこの「自立」は他者との関わりによって実現できるようになると論じた。

近代市民社会における福祉は、直井(2010)はそれを「自助原則」で幸せな暮らしができない個人に対する支援として論じている。直井(2010)によれば、自助原則は、「おとなになったら自分で働いて稼ぎ、それによって市場から好きなものを購入して生活する自由があるかわりに、財の配分、生活変動への準備も自分の責任において行うべきものである」ことを意味するが、「現実には個人の病気や障害、景気変動による失業などもあって、自助努力だけでは暮らしが破壊されてしまう危険はたくさんあり、その場合には何らかの『支援』が必要となる。このような支援を通じて幸せな暮らしを実現すること、あるいはそれを保障することを『福祉』と呼ぶこともある」。この支援システ

ムは、支援する者(個人, 組織), 支援される者(個人, 世帯), その間をいきかう支援(サービス, 貨幣など)の三者によって構成される。

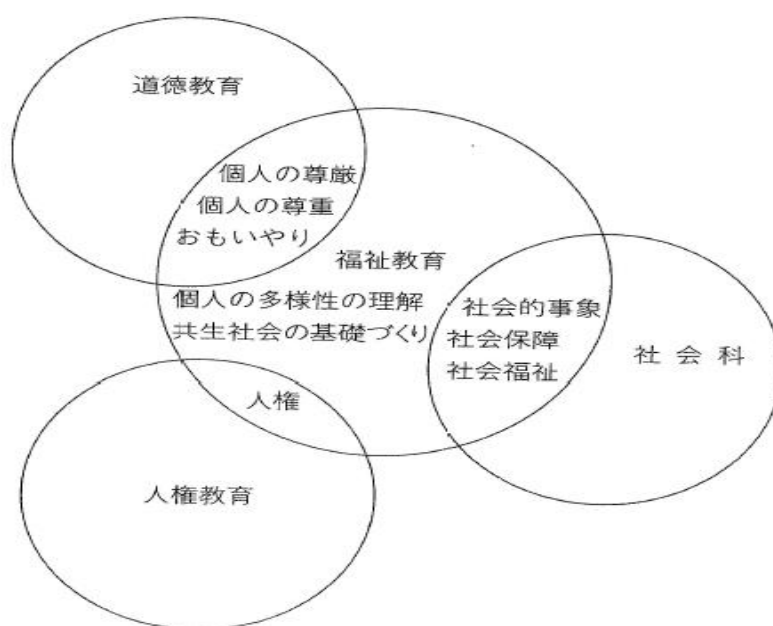
上記の福祉の概念を踏まえて、福祉教育をより体系的に定義したのは、社会福祉法人全国社会福祉協議会の「福祉教育研究委員会」が1982年9月に出した規定である。そこで福祉教育を、「憲法13条, 25条等に規定された人権を前提にして成り立つ平和と民主主義社会を作り上げるために、歴史的にも、社会的にも疎外されてきた社会福祉問題を素材として学習することであり、それらとの切り結びを通して社会福祉制度、活動への関心と理解をすすめ、自らの人間形成を図りつつ社会福祉サービスを受給している人々を、社会から、地域から疎外することなく、共に手をたずさえて豊かに生きていく力、社会福祉問題を解決する実践力を身につけることを目的に行われる意図的な活動」として定義している。阪野(1998)によれば、上記の概念規定は次の特色を有している。すなわち、「①人権思想をベースにする。②歴史的・社会的存在としての社会福祉問題を学習素材とする。③社会福祉問題との切り結びを通して、社会福祉制度や活動への関心と理解を進める。④社会福祉問題を解決する実践力を付けるために、実践に基づく体験学習を重視する。⑤自立と共生の福祉社会の主体形成を図るといった点である」。

高野(2006)によれば、学校教育において、高等学校の福祉科は1999年3月告示の学習指導要領に示され、実際の教育活動に導入されたが、それは専門教育に関する教科であり、その創設の背景と学習内容から超高齢化社会の到来への対応策のひとつとしての職業教育として位置づけられる。普通教育における福祉教育の展開は見当が付かない状況である。特に、小学校と中学校の段階における福祉教育の位置づけは学習指導要領上で未だ明確にされていない。福祉教育に関する実践は、学校行事などの特別活動の時間を活用するものと各教科あるいは道徳の授業時間に行われたものであった。

学習指導要領における位置づけが不明確であるにもかかわらず、学校教育における福祉教育論の構築は多数見られる。例えば、西尾・上續(2000)は、福祉教育を「個人の多様性を理解させ、共生社会の基盤を培教育」と定義し、福祉教育と学校教育の目的と内容の融合したレベルで、他教科内容との関係から福祉教育の位置づけを第1図のように示した。第1図から確認できるように、西尾・上續(2000)は、学校教育の各教科・領域をまたがるクロス・カリキュラムのかたちで、福祉教育の位置づけを示している。また、村上(1998)は、人権教育を福祉教育の中心的な内容として捉え、小学校及び中学校における福祉教育は、「子どもたちが自ら主体的な学習を通して、(省略)、人権が大切にされる前提としての、豊かな感性を磨き、うるおいのある情操を養っていなければならない」と論じて、小学校の低学年・中学年・高学年と中学校の各学年の目標と内容を体系化した。

さらに、小中学校2002年度そして高等学校2003年度から取り組む「総合的な学習の時間」は福祉教育を展開する枠を提供したことで、現在「創意工夫を生かした特色ある

教育活動」として、福祉教育の実践が一部の学校に行われた報告が見られる。



第1図 小中学校における福祉教育の位置づけ

西尾・上續(2000, p. 16)より転載

学校における福祉教育が実質に進行している中、福祉教育の全体状況を把握した研究として、西尾・上續(2000)は各都道府県・政令指定都市の教育委員会・社会福祉協議会を対象に、小中学校における「福祉教育の関係資料」「福祉教育の取り組み」「福祉に関する考え方」に関する調査を行った。大規模の調査は1995年に行われたが、その結果として、「学校教育における福祉教育の必要性が強調され、多くの福祉教育関連資料が作成されつつある」や「学校における福祉教育は、社会福祉の体験活動、地域や福祉施設との訪問交流活動、啓発活動等、学校内外で行われるさまざまな教育活動を通して行われ、(省略)、福祉問題を抱えた高齢者や障害者との交流は児童生徒に大きいインパクトを与える場合が多いようである」といったことが明らかになった。一方、「各都道府県・政令指定都市の教育委員会及び社会福祉協議会は、日々変化する社会福祉をめぐる実状に即した資料の作成を心がけるべく、福祉教育への認識・理解を深めていく必要がある」「学校の中だけで体系的・計画的に福祉教育を実施していくことは、様々な制約の中で困難が伴うことも事実である」といった課題も浮上した。

上述したように、福祉教育は教科・領域に内面化することで次第に学校教育に浸透しているが、学校現場における認識・理解は未だ十分とは言えず、実施上における課題

は依然に存在している。その一方で、福祉教育に関する研究状況も乏しいと言わざるを得ない。特に離島の福祉に関するこれまでの先行研究は、山田(2000)や慎(2001)による研究のように、如何に物理的な側面において、離島の社会福祉環境を改善するかを中心的に検討する傾向が主な研究関心である。島内における人間関係や生活文化などの精神的な側面において、離島の社会福祉の増進を探究する研究傾向は未だ弱い。このスタイルの研究実践は「新潟県粟島浦村」に関する幾つかの調査研究に限る。例えば、第Ⅱ章で詳述するが、新潟県粟島浦村の島民の精神的健康や福祉意識に対する調査を中心とした村山ほか(2006)、志水ほか(2007)、大月ほか(2008)などの研究実践が挙げられる。しかし、離島住民の精神的健康や福祉意識の状況及びそれを影響する要因を検討した上記のような研究実践は散在するが、離島の社会福祉を増進するために、福祉教育の可能性やあり方を検討する先行研究は見当たらない。

阪野(1998)は、「社会構造的に生み出され、歴史的・社会的に存在する社会福祉問題と切り結び、とりわけ社会福祉問題を集中的に体现している高齢者や障害者などの社会福祉サービス利用者や必要者との交流活動や共働活動、その人たちへの支援活動などを通して、豊かな、ゆとりのある、共に生き、共に育つ福祉社会のまちづくりを進めようとする意図的・計画的な教育実践」として福祉教育の位置づけや役割を説明した。このような福祉に関連する社会問題や課題を中心的に取り組む福祉教育の定義や位置づけから見れば、社会福祉問題の解決を図るために、法や行政の働きの他に、福祉教育による機能や効果を期待することもできるであろう。むしろ、社会構造のレベルにおける福祉問題の場合は、他の環境問題や交通問題のような社会問題と同様に、教育や福祉教育によってこそ、有効かつ長期的な解決策が生まれる可能性が高いと考える。

上記の福祉教育の現状及び離島における福祉教育に関する先行研究の課題を踏まえて、本研究は離島における社会福祉の増進を目指した福祉教育のモデル及びその実施計画の開発を試みる。離島の福祉状況に即した福祉教育のモデルとその実施計画を開発することで、離島の社会福祉の向上を図りながら、離島における福祉教育研究の空白を埋めていきたい。このような研究目的を達成するために、本研究は先行研究の蓄積のある新潟県粟島浦村を調査地として選定し、調査研究を行う。具体的には、まず、既存の先行研究の分析及び現地での聞き取り調査によって、粟島浦村における社会福祉の現状と課題を明らかにする。次に、粟島浦村における児童生徒の福祉に関する意識の実態を調査によって明らかにする。最後に、粟島浦村の社会福祉の状況に適した福祉教育を離島における福祉教育の一モデルとして提案した上で、その実現に向けた学習单元案を構想する。

Ⅱ. 粟島浦村の福祉状況と福祉教育

粟島浦村は東経 139° , 北緯 38° に位置する新潟県岩船郡の離島である。陸岸との接

続は新潟県村上市の岩船港から発する高速船とフェリーになっており、高速船で 55 分、フェリーで 90 分の運航時間である。島の全体は平地が少なく、山地が主な地形である。栗島浦村は内浦と釜谷の二つの集落によって構成される。主要産業は漁業と民宿の 6 次産業で、観光・交流関係産業がその次に発達する産業である。栗島浦村が 2016 年 3 月に発行した「栗島浦村人口ビジョン」によれば、島の人口は、2015 年で 326 人であるが、そのうち老年人口は 147 人で、人口減少が継続しており、とりわけ高齢化の進展が顕著であることがわかる。

1. 栗島浦村の福祉状況

冒頭で述べたように、数多くの離島は隔絶性の影響で、高齢化や過疎化が進み、生活基盤の脆弱性から福祉課題や教育課題が自然に生まれてくる。栗島浦村も例外ではない。新潟県が 2013 年 4 月に発行した「新潟県離島振興計画」において、栗島の福祉課題は「医療」「高齢者介護」「子育て」の三つの部分から提起されている。すなわち、医療については、「へき地医療拠点病院やへき地診療所等により提供されているが、離島という地理的な条件もあり、医師等医療従事者の確保が難しい状況にある。限られた医療資源を有効に活用しながら、離島においても安心して医療サービスが受けられる医療提供体制の整備が必要である」。高齢者介護については、「高齢化が顕著である離島において、今、介護需要が高まってきている中、多様なニーズに配慮しつつ、高齢者が地域で自立した生活を送ることができるための体制の整備が必要である」。また、子育てについては、「少子化が進行する離島においては、地域における子育て支援の充実等、安心して子育てできる環境づくりを進めていくことが必要である」。

三浦ほか(2004)によれば、栗島浦村は無医村であり、2000 年までは診療医との FAX 通信による診療を行っていたが、テレビ電話を用いた遠隔診療は 2003 年 11 月に開始してから、現在に至って、主に TV 診療と看護師による対応で医療事業が行われている。栗島浦村のホームページに記載されているように、「村内には医師がいないため、診療所が唯一の医療機関である。5 月から 9 月は、岩船郡医師会の協力によって月に 3～4 回の出張診療が行われ、総合健診は年に 1 回行われている状況である。緊急時には、ヘリポートや救急患者を運ぶ輸送車を配備、テレビ電話やインターネットを用いた遠隔診療などの医療サポート体制が組まれている」。また、高齢者介護と子育て支援に関する施策としては、栗島浦村保健福祉総合施設が 2001 年に建設され、診療所、通所介護センター、保育園が併設されており、村民の健康増進、医療の充実、福祉の向上が図られている。以下の写真は調査時に筆者が撮影したものである。写真 1 は役場庁舎にあるあわしま保健センターで、写真 2 と写真 3 と写真 4 はそれぞれ栗島浦村保育園、栗島浦村通所介護センター、栗島へき地出張診療所である。実際の写真からも栗島における福祉事業の実態を窺うことができよう。



写真1 あわしま保健センター
(2016年8月29日 筆者撮影)



写真2 粟島浦村保育園
(2016年8月29日 筆者撮影)



写真3 粟島浦村通所介護センター
(2016年8月29日 筆者撮影)



写真4 粟島へき地出張診療所
(2016年8月29日 筆者撮影)

2. 粟島を対象とした地域福祉に関する研究

上述のように、未だ十分とは言えないが、福祉に関する行政の取り組みの進行に伴って、粟島浦村における福祉環境は次第に改善されている。その一方で、粟島浦村を対象とした一連の調査研究は、ライフスタイルを内包した福祉環境と粟島住民の福祉意識や健康状況との関係性を明らかにした。これらの研究実践は粟島における福祉教育を考案する際に非常に建設的な知見を提供している。

例えば、村山ほか(2006)は、新潟県粟島浦村と山形県酒田市飛島の満 65 歳以上の高齢者を対象とした面接調査によって、島嶼地域高齢者の主観的健康感に影響を及ぼす

社会的な要因を考察した。分析の結果から、社会関連性における「規則的な生活」「趣味」「積極性」などの項目が、情緒的サポートでは「元気づけ」、手段的サポートでは「まとまったお金」の項目が、高齢者の主観的健康感を有意に影響することが明らかとなった。その他に、志水ほか(2007)は栗島浦村の満40歳以上の住民299名を対象とした訪問面接や質問紙調査を行った結果、栗島浦村の住民は、独居世帯が少なく、近隣住民との関わりが深く、コミュニケーション頻度も高く、ソーシャル・サポートの授受も多いというライフスタイル上の傾向性が明らかになった。そして、年齢層ごとに見ると、高齢期群では、社会関連性が高く方の割合が多く、社会とのかかわりやソーシャル・サポート体制の維持を目指した社会資源及び側面的支援の対策が望まれること、壮年期群では、現在の生活に対する満足感が低く、悲観的な傾向が強いため、健康な高齢期を迎えるにあたり、望ましい生活習慣より前向きな志向の獲得を目指した健康教育対策が必要であることの二点が提言された。

また、志水ほか(2008)は栗島浦村の住民の精神的健康度とライフスタイル要因のとの関連性を調査したところ、「精神的健康を規定する要因は、住民のライフスタイルと多岐にわたって関連していることが明らかになった」。その結果から、「健康増進施策を講ずる際には、身体的健康に着目するばかりではなく、精神的健康を規定する社会的活動の保持や近隣住民との助け合いの促進、現実の生活や自己を肯定的に捉える態度の醸成を図るためのネットワーク形成に配慮すべきこと」を提言した。最後に、大月ほか(2009)は集合調査法による自記式質問紙を用いて、栗島浦村の「敬老会」の参加者を対象として、栗島浦村における高齢者の生活状況及び福祉ニーズを考察した。その結果、栗島浦村の住民は、「社会関連性指標」「健康生活習慣実践指標」「ソーシャル・サポート尺度」においていずれも高得点率を保つことがわかった。一方で、希望する福祉ニーズにおいて、現状に対する満足と不満足の高齢者の二極化が確認された。福祉やまちづくりに対する住民の知識が不足するため、島民を対象とした福祉教育の展開を課題として提起した。

栗島浦村の福祉状況に関する先行研究は、違う時期に異なる手続きを用いて実施されたが、いずれもライフスタイルによって代表される島内の社会状況が島民の健康状況と福祉意識に影響を及ぼすことを示した。それと共に、島内における社会福祉を向上させるための示唆を提供している。それぞれの研究実践による示唆は、最終的に「地域内の人間関係やつながりからなるライフスタイルを活かしながら、福祉教育の役割を発揮することによって、社会福祉に対する地域住民の意識を向上し、地域の福祉ネットワークを強化すると共に福祉コミュニティの形成を図ること」に集約することができる。松端(2012)によれば、福祉コミュニティは地域福祉理論一つである。すなわち、「直接的なサービス提供の側面のみならず、問題発生の根源である地域社会の社会構造や社会関係のあり方に迫るようなアプローチが必要であり、地域社会そのものが生活課

題の解決機能を担うと同時に、問題発生の予防的機能などを担うことを目指したコミュニティづくりを、地域組織化活動や福祉組織化活動を通じて実現していくこと」を重視する考え方である。

成人を対象とする福祉教育の充実は、社会教育・生涯学習の分野に帰属されるため、本研究では、学校教育における福祉教育に焦点を当てる。また、栗島浦村において小学校と中学校しか存在しないため、小中学校を中心に福祉教育のあり方を探究していきたい。しかし、福祉教育という範疇は非常に広いため、本研究では高齢者福祉に主眼を置くことにする。その理由は、栗島浦村を拠点とした先行研究は殆ど島内における高齢者を対象とした研究実践である。このように高齢者に収束した研究関心は、離島における高齢者福祉問題の重要性を表しているだけでなく、前述した栗島浦村の社会状況にも一致している。したがって、本研究は、離島における社会福祉の高齢者福祉を取り扱う学校教育のあり方について検討する。

Ⅲ. 栗島浦村の小中学生の高齢者意識

「学校における福祉教育」について前述したように、福祉教育は学校教育に浸透しつつあるが、問題や課題も数多く存在している。原田(2016)によれば、2002年度の学習指導要領から、「生きる力」を身につけていくために、子どものときから社会福祉を学ぶこと、ボランティアなどを体験することの大切さが認められてきたわけで、学校における福祉教育やボランティア活動は学校における位置づけが向上してきたが、そこで「社会福祉の専門知識」ではなく、「老いる」とはどういうことか、「障害」とは何か、「人が生きるとはどういうことか」を体験的に学ぶことが第一である。

また、原田(2014)は、福祉コミュニティを構築する際に、「高齢者観」の形成、言い換えれば『『老い』』ということをどのように伝え、教育していくかは大きな課題であると主張した。原田(2014)によれば、高齢者福祉をテーマにした学校の福祉教育実践は、高齢者との交流や高齢者施設訪問などの疑似体験プログラムが多い。しかし、それらの実践は高齢者の「大変さ」を強調するにすぎず、高齢者の尊厳につながらないまま授業実践が終わるという課題を抱えている。これらの研究知見及び福祉教育の本質的な意味からすれば、学校における高齢者福祉教育は、高齢者の「大変さ」という皮相的なレベルで学習活動を終始させないように、高齢者が生きる地域社会の状況に児童生徒の視線を向かせて、高齢者問題が生まれた社会構造的な要因を認識させることで、高齢者の価値観や意思決定を理解し、その尊厳ある生き方をリアルに感受させることが必要であると考えられる。しかし、児童生徒も生活者であるため、日常生活において高齢者との接触によって、自然に一定程度の高齢者意識や老人観を形成していると推測される。したがって、上述のような高齢者福祉教育を実現するための方法論やモデルを検討するに先立ち、高齢者に対する児童生徒の意識を把握しておく必要がある。次の章において、

高齢者、つまり「お年寄り」に対する栗島浦村の児童生徒の意識状況を質問紙調査の結果から考察する。

1. 調査の概要

高齢者に対する児童生徒の意識を測るために、栗島浦小学校と栗島浦中学校の在校生を対象に質問紙調査を行った。質問紙調査では、「学年」「性別」「居住地」といった児童生徒の属性を含めて、「高齢者の年齢区分(問4)」、「高齢者との暮らし経験(問5)」、「高齢者との接触の頻度(問6)」、「学校における高齢者の学習経験(問7)」、「高齢者に対するイメージ(問8)」について、質問項目を作成した。質問紙項目は本文の最後にある「参考資料」に提示している。栗島浦小学校と栗島浦中学校からそれぞれ14名と10名分の回答を回収することができた。

2. 調査の結果の分析

a) 児童生徒の属性

質問紙調査に協力した栗島浦小学校と栗島浦中学校の児童生徒の基本状況は以下の第1表に示す通りである。第1表から読み取れるように、小学校から中学校の全学年は小人数クラスとなっており、計24名の児童生徒のうち、島外に住んでいる子どもは19名で、島内の方の人数(5名)をはるかに超えている。さらに、中学校では、2年生の女子生徒を除くと、生徒全員が栗島の外部に住んでいる。こうした状況は栗島浦村におけるしおかぜ留学事業の効果を実証することができる。

第1表 栗島浦小学校と栗島浦中学校の児童生徒の基本状況

| 学年 | 小1 | | 小2 | | 小3 | | 小4 | | 小5 | | 小6 | | 中1 | | 中2 | | 中3 | | 合計 |
|----|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 性別 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 島内 | | 1 | | 1 | 1 | | | 1 | | | | | | | | 1 | | | 5 |
| 島外 | 1 | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | 1 | | 3 | 1 | 2 | 1 | 2 | 1 | | 3 | 19 |
| 合計 | 2 | | 2 | | 3 | | 2 | | 1 | | 4 | | 3 | | 4 | | 3 | | 24 |

b) 高齢者の年齢区分

高齢者は一般的に年齢の高い人を意味するが、『デジタル大辞泉』によれば、日本における後期高齢者医療制度では65歳以上75歳未満を前期高齢者、75歳以上を後期高齢者と規定している。また、世界保健機関(WHO)では65歳以上を高齢者としている。高齢者の年齢に対する栗島浦村の児童生徒の意識は次の第2表に示した。第2表から分かるように、「65～69歳」のお年寄りを高齢者と認識する児童生徒は最も多く、その次の年齢は「70～74歳」である。このような区切り方は、児童生徒における高齢者を認定する水準として、年齢の違うお年寄りに対する接し方の相違を生み出すことが推測

される。

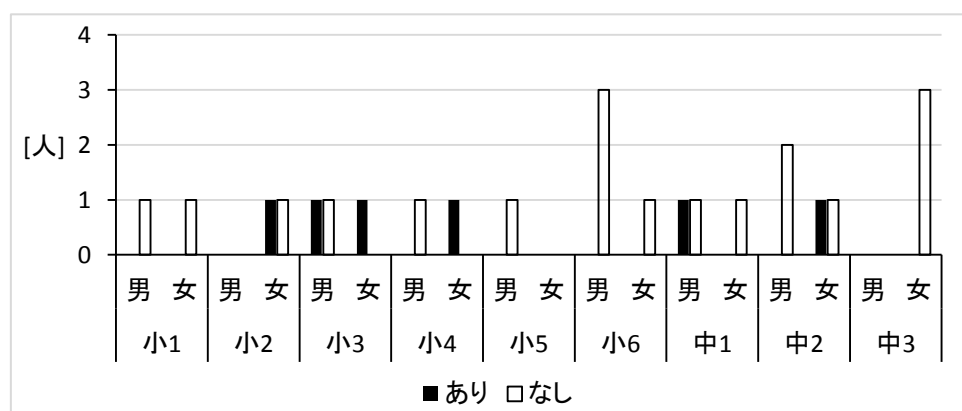
第2表 高齢者の年齢に対する児童生徒の意識

| 学年 | | 小1 | | 小2 | | 小3 | | 小4 | | 小5 | | 小6 | | 中1 | | 中2 | | 中3 | | 合計 |
|----|--------|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 性別 | | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 年齢 | 分からない | 1 | 1 | | | 1 | | | | 1 | | | | | | | | | | 4 |
| | 50～59歳 | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | | | 1 |
| | 60～64歳 | | | | | | | | | | | 2 | 1 | | | | | | 1 | 4 |
| | 65～69歳 | | | | | | 1 | | | | | 1 | | 1 | 1 | 2 | | 2 | | 8 |
| | 70～74歳 | | | | 1 | 1 | 1 | | | | | | | 1 | | 1 | | | | 5 |
| | 75～79歳 | | | | 1 | | | 1 | | | | | | | | | | | | 2 |

c) 高齢者との暮らし経験

高齢者と一緒に暮らしているかどうか、言い換えれば、高齢者との生活経験は、学校における高齢者の学習よりも先に児童生徒の高齢者像の形成に影響を及ぼすことが推測される。高齢者と暮らした経験を持つ児童生徒は6名で、残りの16名の児童生徒は高齢者と一緒に暮らしたことはないことが分かった。各学年の児童生徒の状況は第2図に示した通りである。第2図から、小学校6年生の男児と中学校3年生の女子生徒の方は、高齢者と一緒に暮らした経験をより多く持っていることが読み取れる。

また、高齢者と一緒に暮らした経験を持つ島内に居住する児童生徒は4名で、その経験を持たない18名の児童生徒は、一人を除いて残りの17名は全員島外に住んでいることであった。統計ソフト SPSS を用いて、居住地と暮らし経験の有無に関するクロス集計を行った結果、 $\chi^2(1, N=24)=10.189, P<.01$ で、有意の連関性を確認することができた。



第2図 栗島浦村の児童生徒の高齢者との暮らし経験

これにより、島内に居住する児童生徒は高齢者と一緒に暮らした経験が豊富で、高齢者に対する理解を得る機会が多いことが言えよう。なお、暮らし経験の男女差については、有意の連関性を検出することができなかった。

d) 高齢者との接触の頻度

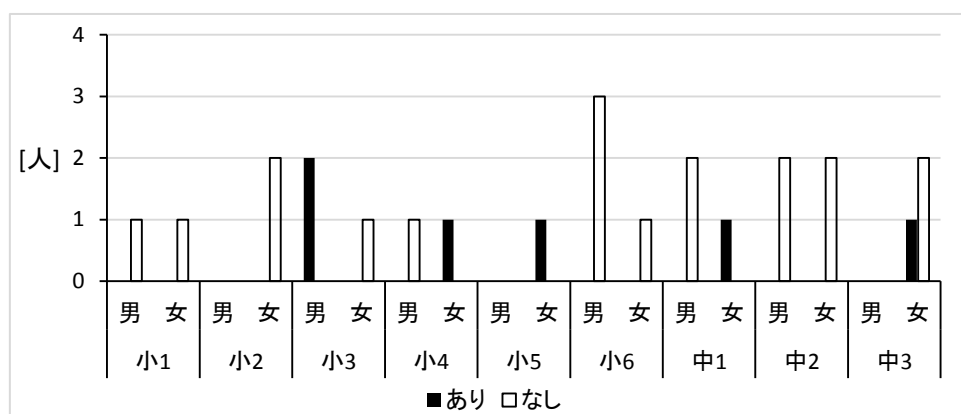
日常生活における児童生徒と高齢者の接触の頻度を測るために、週単位で話し合いの回数を考察した。第3表から確認できるように、「よく話している、回数がかぞえられない」児童生徒は9名がいる一方で、「あまり話していない」児童生徒は5名もいた。計24名の児童生徒のうち、約2割の児童生徒は高齢者との接触を持たないことから、世代間交流の乏しさに危機感を抱かざるを得ない。また、「あまり話していない」から「よく話している、回数がかぞえられない」までの選択肢を「1～6」までに通増的に段階化した上で、SPSS で接触の頻度を児童生徒の「性別、居住地、暮らし経験」とクロス集計した結果、いずれも有意の連関を検出することができなかった。

第3表 栗島浦村の児童生徒と高齢者との話し合いの頻度

| 学年 | | 小1 | | 小2 | | 小3 | | 小4 | | 小5 | | 小6 | | 中1 | | 中2 | | 中3 | | 合計 |
|----|-----------|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| 性別 | | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 頻度 | あまり話していない | 1 | | | | 1 | | 1 | | | | 2 | | | | | | | | 5 |
| | 1回/週 | | | | | | | | | | | | | | | 1 | | | | 1 |
| | 2～4回/週 | | 1 | | | | | | | 1 | | | | | | | | 3 | | 5 |
| | 5～7回/週 | | | | | | | | | | | 1 | | | 1 | | | | | 2 |
| | 8～10/週 | | | | | | | | | | | 1 | 1 | | | | | | | 2 |
| | よく話している | | | | 2 | 1 | 1 | | 1 | | | | | 1 | 1 | 1 | 1 | | | 9 |

e) 学校における高齢者の学習経験

児童生徒は日常生活において、高齢者に対する意識や理解を形成する一方で、学校における学習活動に参加することで、高齢者に対する認識を深まることを仮説として、検証した。その結果は以下の第3図に示す通りである。学校において高齢者に関する学習経験を持つ児童生徒は6名で、それ以外の18名は経験していないこととなった。経験を持つ6名の児童生徒のうち、小学校が4名で、中学校は2名であった。こうした結果は、離島の学校における高齢者(福祉)教育の貧弱度を忠実に反映していると共に、全国における福祉教育の推進状況とも一致している。とりわけ本研究の研究的・社会的意義を裏付けている。また、学習経験の有無を児童生徒の「性別、居住地」とクロス集計した結果、いずれも有意の連関性を確認することができなかった。



第3図 栗島浦村の児童生徒の高齢者に関する学習経験

f) 高齢者に対するイメージ

高齢者に対するイメージをより詳細に引き出すために、記述式の質問項目を設けた。児童生徒の識字能力を考慮した上で、ふりがなをつけて、回答しやすいように質問の意図を説明した。24名の児童生徒の回答は以下第4表に示す通りである。

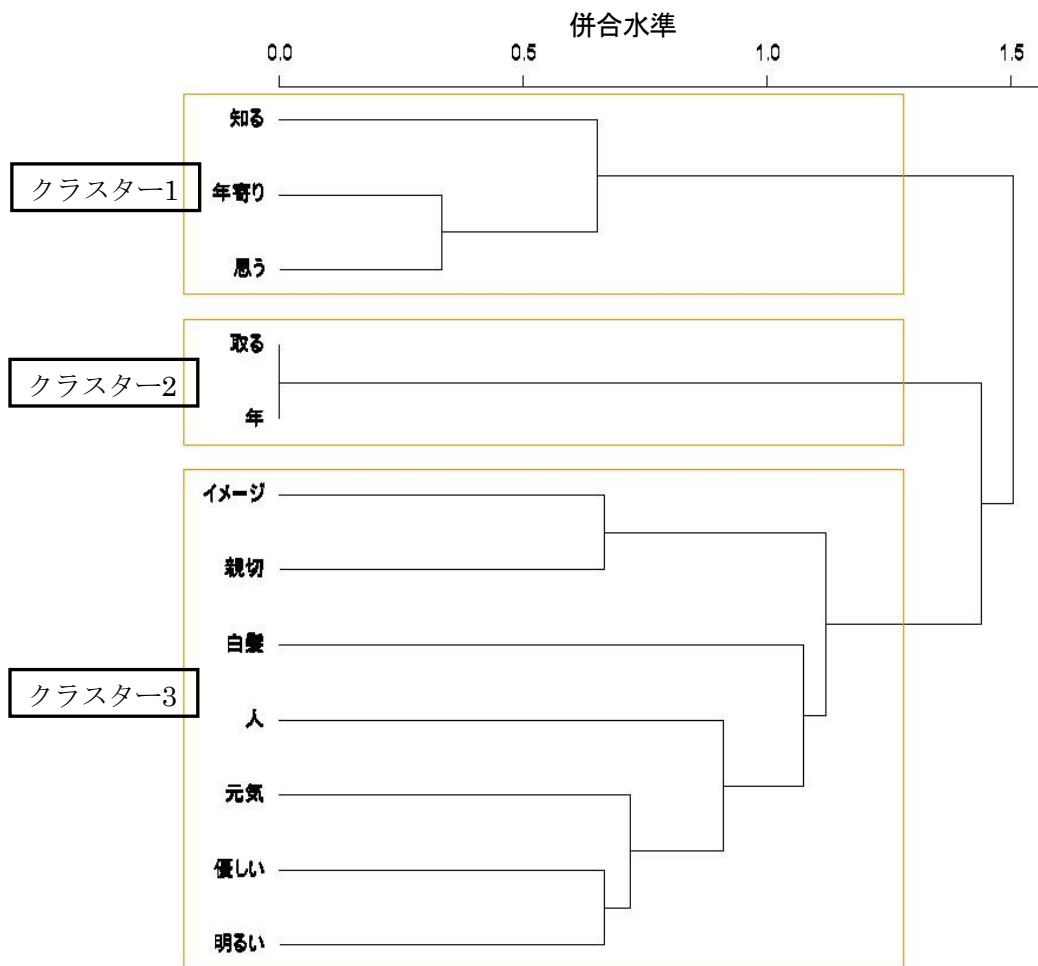
第4表 高齢者に対する栗島浦村の児童生徒のイメージ

| 番号 | 学年 | 性別 | 居住地 | 高齢者に対するイメージ | 要素の数 | 傾向 |
|----|----|----|-----|---|------|----|
| 1 | 中3 | 女 | 島外 | 優しくて元気なイメージ | 2 | + |
| 2 | 中3 | 女 | 島外 | 経験が豊富で、頼りになる。恥ずかしがることなく、行動に移しているのがすごい。元気 | 5 | + |
| 3 | 中3 | 女 | 島外 | 戦争のことなどを知っていて、昔のことをよく知ることができる。けど、お年寄りが増えることで、税金が上がったり、看護がちょっとめんどくさいと思う。 | 3 | +- |
| 4 | 中2 | 男 | 島外 | やさしい | 1 | + |
| 5 | 中2 | 女 | 島外 | わからない | 0 | 0 |
| 6 | 中2 | 女 | 島内 | あまり動けない。めっちゃしゃべる | 2 | - |
| 7 | 中2 | 男 | 島外 | 優しい、親切な人 | 2 | + |
| 8 | 中1 | 男 | 島外 | とても元気で活発、とても明るくて優しい | 4 | + |
| 9 | 中1 | 女 | 島外 | 優しい | 1 | + |

| | | | | | | |
|----|----|---|----|--|---|--------|
| 10 | 中1 | 男 | 島外 | 良い人だと思う | 1 | + |
| 11 | 小6 | 男 | 島外 | ゆっくり動く。耳が遠い | 2 | - |
| 12 | 小6 | 男 | 島外 | 移動したりしゃべったり, 認知症になったり, 大変だと思うけど, ぼくたちで力を合わせて助ければ, お年寄りも元気に過ごせると思います。 | 5 | - |
| 13 | 小6 | 女 | 島外 | 優しい人で, 元気で明るい人 | 3 | + |
| 14 | 小6 | 男 | 島外 | 明るくてやさしい | 2 | + |
| 15 | 小5 | 男 | 島外 | 優しいイメージ。いろいろなことを教えてくれる。親切にするとかえってくる | 3 | + |
| 16 | 小4 | 男 | 島外 | 年を取っている | 1 | 0 |
| 17 | 小4 | 女 | 島内 | 栗島に初めてくる人を温かく迎えてくれそう | 1 | + |
| 18 | 小3 | 男 | 島外 | ない | 0 | 0 |
| 19 | 小3 | 男 | 島内 | しわが多いし, 年を取っている | 2 | - |
| 20 | 小3 | 女 | 島外 | お菓子をくれる | 1 | + |
| 21 | 小2 | 女 | 島外 | とても優しいし, 明るく話しかけてくれる。 | 2 | + |
| 22 | 小2 | 女 | 島内 | しわがあって, 白髪だらけ, 優しい, 目が寝かけている, よくしゃべる。 | 5 | - + |
| 23 | 小1 | 男 | 島外 | しわがあって, 白髪だらけ | 2 | - |
| 24 | 小1 | 女 | 島内 | しわがあって, 料理が上手 | 2 | + |

児童生徒の回答を分析する際に, 回答内容における高齢者を描写する「表現」をそれぞれ1要素として数えて, 各解答に出現した要素を第4表の「要素の数」欄に示した。各回答の要素数を児童生徒の「性別, 居住地, 暮らし経験, 接触の頻度, 学習経験」とクロス集計した結果, いずれも有意の連関性を検出することができなかった。小学校と中学校といった学校種による有意差も確認することができなかった。

また, 児童生徒は高齢者をどのように, つまり「良い・悪い」, 言い換えれば「+ -」で捉えるかをできる範囲で分析し, それぞれの回答の傾向をまとめた。文脈がないか推測のつかない回答の傾向は「0」とした。第4表から分かるように, 傾向が確認できない2名の児童生徒を除いて, 「-」傾向の児童生徒は6名で, 残りの14名の児童生徒はのうち, 12名が高齢者に対して「+」傾向のイメージを持っている。2名の生徒は「+」と「-」傾向のイメージを両方持っている。



第4図 高齢者に対する栗島浦村の児童生徒のイメージ

児童生徒の回答をより深く考察するために、テキストを分析するソフトであるKHcoderを用いて、回答内容に対するクラスター分析を行った。得られたクラスターは第4図(樹状図)に示す通りである。第4図では、児童生徒の回答から、三つのクラスターが検出された。なお、各クラスター及びクラスター内の言葉は、左の方で縦につながっているほど出現の仕方が似通っている。また、上方にある横軸は、クラスターを凝集するプロセスにおいて、言葉を併合する水準(非類似度)を意味しており、数値が小さいほどクラスターや言葉同士の出現パターンが似通っている。

第4図から読み取れるように、クラスター1は、「高齢者が色々知っている」といった回答から、高齢者に対して児童生徒は「博識である」というイメージを持つことが

わかる。クラスター2は、「年を取っている」などの回答で、高齢者に対して「高齢」のイメージを持つことがわかる。クラスター3は、幾つかの下位クラスターによって構成されたが、「明るい」「優しい」「元気」「親切」という情緒的なイメージと「白髪」という外見的なイメージを確認することができる。

3. 小中学生の高齢者意識の考察

「学年」「性別」「居住地」、「高齢者の年齢区分(問4)」、「高齢者との暮らし経験(問5)」、「高齢者との接触の頻度(問6)」、「学校における高齢者の学習経験(問7)」、「高齢者に対するイメージ(問8)」について分析した結果、栗島浦村の児童生徒の高齢者意識を次のように把握することができる。児童生徒の高齢者意識は「－」志向より「＋」志向の方が多く存在している。高齢者意識は部分的であるため、高齢者に対する全面的且つ深まった理解が欠ける。統計的な関連性を確認することができなかったが、実際の生活状況からは、児童生徒は日常生活のレベルで、一定程度で高齢者と接触を持つことで、高齢者意識を形成していることが推測されている。こうした意識は日常経験によって形作られるため、「通識」という皮相的なレベルに留まることが一般的に確認される。

その一方で、児童生徒の高齢者意識は、「博識」「高齢」「白髪」といった通識の他に、高齢者の情緒的な特徴までに到達することも確認できる。稀に社会構造的なレベルにおいて高齢者を理解する中学校3年生の女子生徒もいたが、学校において高齢者に関する学習活動に参加する機会が少ないため、児童生徒の全体は、通識レベルの高齢者意識を乗り越えて、社会構造といったレベルで高齢者を取り巻く生活上の問題や地域の課題までに至ることが困難である。そのため、高齢者の価値観や意思決定及びそこから派出する生き方に対する思考が、児童生徒の中に生じにくい状況となっている。

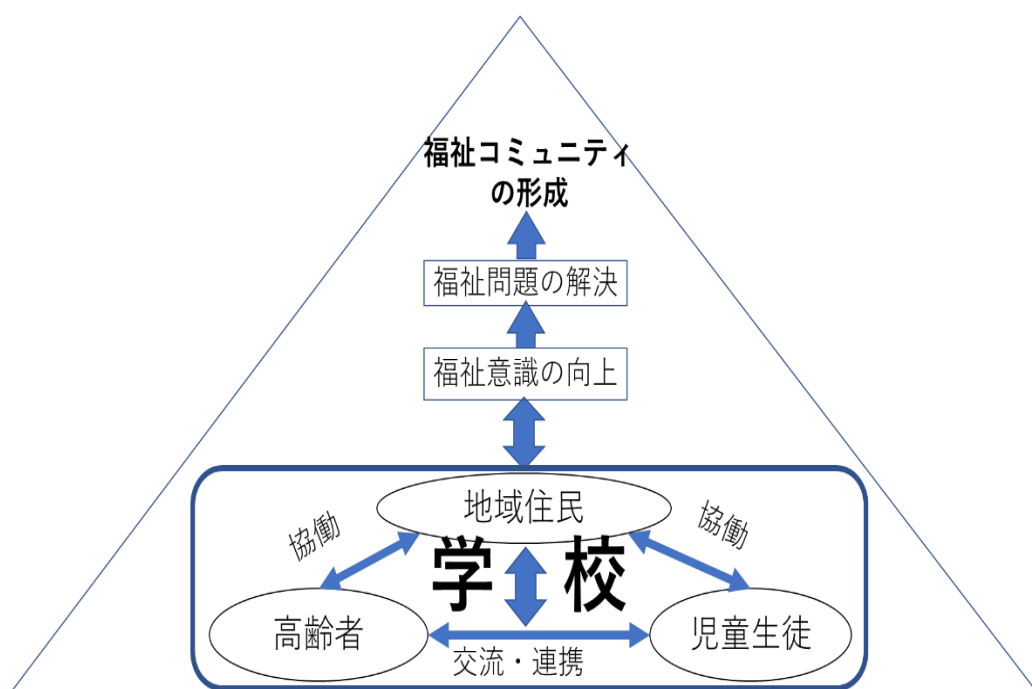
IV. 栗島浦村における福祉コミュニティの構築

前述のように、栗島浦村の福祉状況に関する先行研究の示唆は、最終的に「地域内の人間関係やつながりからなるライフスタイルを活かしながら、福祉教育の役割を発揮することによって、社会福祉に対する地域住民の意識を向上し、地域の福祉ネットワークを強化すると共に福祉コミュニティの形成を図ること」に集約することができる。こうした知見を参考にしながら、栗島浦村における社会福祉や福祉教育の状況と学校における児童生徒の福祉意識の特徴を踏まえて、本研究は栗島浦村における福祉教育、具体的には高齢者福祉教育のあり方を次のように考案する。

1. 栗島浦村における福祉教育のあり方

第5図のモデルに示したように、本研究で考案した福祉教育は、学校を拠点として、地域全体までに拡大する福祉ネットワークの構築によるものである。その基本理念は、学校における児童生徒と高齢者との交流・連携活動を通じて、地域福祉に関する情報を地域全体に発信することによって、児童生徒と高齢者を含む地域住民は、福祉理解を深

め、福祉意識を向上した上で、協働ネットワークを構築し、地域の福祉問題の解決を図ることで、最終的に福祉コミュニティを形成していくことである。



第5図 栗島における福祉教育のモデル

(筆者作成)

このような福祉教育を推進するにあたって、学校の教職員、児童生徒、高齢者などを含む栗島浦村の地域住民の「福祉理解の深化」と「福祉意識の向上」は最も重要である。この二点は地域福祉の増進の成敗に関わる要因であると言っても過言ではない。その理由は、民主主義社会における福祉制度・政策の策定や改善、地域の福祉的機能の強化は、いずれも地域住民の主体的な活動や取り組みによって生まれるものである。その際に、社会福祉の理解、福祉意識の向上は、地域住民が社会福祉のあり方を思考し、福祉問題をもたらした社会構造を認識し、積極的に問題解決を図っていくことの基本条件及び深層的な動機付けとなるからである。

2. 栗島浦村の学校における福祉教育の単元構想

福祉教育の定義や位置づけは、学校における福祉教育の基本的なスタートラインになるが、上記の福祉教育モデルを学校教育において具現化する際に、前述した栗島浦村の福祉状況及学校の児童生徒のもつ福祉意識の現状を踏まえていく必要がある。本研究は、児童生徒の意識状況から出発し、栗島浦村の高齢者福祉問題を教材化した学習単

元を計画した。福祉教育の本質的な意味と位置づけに内在した「社会構造的なレベルにおける問題解決」といった性格を勘案して、本研究における学習単元案は小学校と中学校の社会科を対象としているが、総合的な学習の時間における実施も視野に入れている。なお、意識状況や発達段階を考慮した上で、学習単元の対象を小学校第6学年から中学校の3学年までの児童生徒とした。単元構成は以下第5表に示す通りである。

第5表 「私たちの栗島と高齢者」の単元構成

| 対象学年： 小学校6年生, 中学校1年生, 中学校2年生, 中学校3年生 | | | |
|--|---------------------|----|---|
| 単元目標： | | | |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ 栗島浦村の高齢者の生活状況を理解することができる。 ・ 高齢者を取り巻く栗島浦村の福祉問題を理解することができる。 ・ 栗島浦村の福祉問題をもたらした社会状況を理解することができる。 ・ 栗島浦村の福祉問題について調べて、解決策を考えることができる。 ・ 栗島浦村の福祉問題についての解決策を地域住民に発信することができる。 | | | |
| 学年 | テーマ | 時間 | 概要 |
| 小学校6年 | 栗島浦村の高齢者の生活状況 | 2 | 栗島浦村島の高齢者に対する聞き取り調査を行う。 |
| | | 1 | 高齢者の生活状況について聞き取った内容をまとめる。 |
| 中学校1年 | 栗島浦村の福祉問題 | 2 | 栗島浦村の役場と福祉施設を訪問し、島内の福祉状況について調べる。 |
| | | 2 | 栗島浦村の福祉状況について調査した内容をまとめる。 |
| | | 1 | 栗島浦村の福祉状況から高齢者福祉問題を抽出し、その問題の背景について考える。 |
| 中学校2年 | 栗島浦村の福祉問題をもたらした社会状況 | 2 | 「福祉資源の問題」 医療事業や介護サービスについて調べて、その状況と地域の自然環境や経済状況との関係性を考えて説明する。 |
| | | 2 | 「福祉理解と意識の問題」 高齢者福祉問題に対する地域住民の理解と考えを調べて、それが実際の福祉問題に与える影響を考える。 |
| 中学校3年 | 栗島浦村の福祉問題の解決策 | 2 | 福祉資源の問題と福祉理解と意識の問題について調べたものをまとめて、それらの問題の解決策を考 |

| | | | |
|--|--|---|-------------------------------------|
| | | | える。 |
| | | 2 | 福祉問題に関する解決策を地域住民に説明し、実施可能性について検討する。 |

(筆者作成)

V. おわりに

離島における福祉教育研究の空白を埋めようとする本研究は、離島における地域福祉の増進を目指した福祉教育のモデル及びその実施計画の開発を研究目的として設定した。このような研究目的を達成するために、本研究は、福祉と教育の本質的な意味までに遡って検討した上で、福祉研究の蓄積のある新潟県粟島浦村を調査地として選定し、研究活動を展開した。

具体的には、まず、既存の先行研究の分析及び現地における聞き取り調査によって、粟島浦村における社会福祉の現状と課題を明らかにした。そこで、「地域内の人間関係やつながりからなるライフスタイルを活かしながら、福祉教育の役割を発揮することによって、社会福祉に対する地域住民の意識を向上し、地域の福祉ネットワークを強化すると共に福祉コミュニティの形成を図ること」の必要性を導き出した。次に、粟島浦村における高齢者福祉の状況を踏まえて、児童生徒の高齢者に関する意識の実態を質問紙調査によって考察した。その結果、児童生徒の高齢者意識は「通識」という皮相的なレベルに留まることが一般的で、社会構造といったレベルで高齢者を取り巻く生活上の問題や地域の課題までに至ることが困難であるため、高齢者の価値観や意思決定及びそこから派出する生き方に対する思考が生じにくいことが明らかになった。最後に、粟島浦村の社会福祉状況及び児童生徒の高齢者意識の特徴を踏まえた上で、学校を拠点として、地域全体までに拡大する福祉ネットワークの構築による福祉コミュニティの形成を目指した福祉教育モデルを開発した。こうした粟島浦村に適した福祉教育モデルを離島における福祉教育の一モデルとして提案した上で、開発した教育モデルの実現に向けた学習单元案を構想して提示した。

しかし、本研究で粟島浦村の状況に基づき開発した福祉教育モデルと学習单元案はあくまで「計画」であるため、その実行可能性と学習効果に関する検証はこれからの課題になる。教育理論は実践によって検証されて淘汰されていく。しかし、こうした本研究のような取り組みによる蓄積があってこそ、離島における福祉教育研究の理論がより充実していくと考える。そして、理論の開発と共に、本研究を用いて調査地である粟島浦村の社会福祉の増進に微力を捧げたい。

謝辞

本研究を実施するにあたり、多くの方々のご協力をいただきました。岩船郡粟島浦村

教育委員会の方々, 栗島浦村役場の方々, 栗島福祉協議会の方々, 栗島浦小学校と栗島浦中学校の教職員の方々, 質問紙調査にご協力をいただいた児童生徒の皆さんへ, この場を借りして, 厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

文献

栗島浦村(2016): 栗島浦村人口ビジョン, p. 7.

栗島浦村(2016): 「島民による栗島創生」戦略～世代や立場を超えた「未来創造プロジェクト」～, p. 4.

栗島浦村ホームページにより, 「福祉・医療」

<http://www.awashimaura.sakura.ne.jp/information/life/> (2017年8月5日).

一番ヶ瀬康子(1987): 第1章 福祉教育の理論. 一番ヶ瀬康子・小川利夫・木谷宜弘・大橋謙策『シリーズ福祉教育第1巻 福祉教育の理論と展開』, 光生館, p. 2.

大月和彦・志水幸・山下・匡将・早川明(2009): 栗島における地域福祉推進に向けた基礎的研究. 文教大学教育学部紀要, **43**, pp. 31-38.

大月和彦・島谷綾郁・前田兼志・北條友子・村山くみ・志水幸(2008): 島嶼地域住民の楽観性の関連要因に関する研究. 生活科学研究, (30), pp. 1-10.

阪野貢(1998): 第2章 福祉教育とは. 村上尚三郎・阪野貢・原田正樹『福祉教育論』, 北大路書房, pp. 14-15.

志水幸・早川明・島谷綾郁・山下匡将・宮本雅央・小関久恵・嘉村藍・村山くみ・大月和彦(2008): 栗島地域住民の精神的健康の関連要因に関する研究. 北海道医療大学看護福祉学部紀要, **15**, pp. 21-30.

志水幸・大月和彦・宮本雅央・山下匡将・村山くみ(2007): 栗島地域住民のライフスタイルに関する研究. 生活科学研究, (29), pp. 167-176.

慎燦益(2001): 離島高齢者の社会生活を支援する保健福祉サービス船の基本コンセプトについて. 長崎総合科学大学紀要, **42**(1・2), pp. 1-9.

菅井直也(2000): 第11章 学校における福祉教育実践の課題と展望. 阪野貢『福祉教育の理論と実践 ー新たな展開を求めてー』, 相川書房, pp. 194-203.

全国社会福祉協議会・福祉教育研究委員会(1982): 「学校外における福祉教育のあり方と推進」中間報告.

高野利夫(2006): 第6章 教科教育と福祉教育. 阪野貢・新崎国広・立石宏昭『福祉教育のすすめ 理論・歴史・実践』, ミネルヴァ書房, pp. 14-15.

直井道子(2010): 1 総論 戦後日本の社会変化と福祉の変化. 直井道子・平岡公一『講座社会学 11 福祉』, 東京大学出版会, pp. 2-14.

新潟県(2013): 新潟県離島振興計画～魅力と活力にあふれ 誰からも愛される島づくり～, 10p.

- 西尾祐吾・上續宏路(2000):『福祉教育の課題 ―今日におけるその実践を踏まえて―』, 晃洋書房, p. 16.
- 原田正樹(2014): 第6章 福祉コミュニティの形成. 直井道子・中野いく子・和気純子『高齢者福祉の世界 補訂版』, 有斐閣, pp. 112-126.
- 原田正樹(2016): 福祉教育と社会福祉. 山縣文治・岡田忠克『よくわかる社会福祉 第11版』 ミネルヴァ書房, pp. 216-217.
- 松端克文(2012): 第Ⅱ章 地域福祉の理念と概念—3 地域福祉の理論. 上野谷加代子・松端克文・山縣文治『よくわかる地域福祉 第5版』 ミネルヴァ書房, 25p.
- 三浦妙・渡部絵里子・中山久美子・板垣真由紀・佐藤睦(2004): 栗島へき地出張診療所における看護活動. 新潟県厚生農業協同組合連合会, 新潟県厚生連医誌, **13**(1), pp. 47-48.
- 宮脇文恵(2006): 第7章 教科教育と福祉教育. 阪野貢・新崎国広・立石宏昭『福祉教育のすすめ 理論・歴史・実践』, ミネルヴァ書房, pp. 88-100.
- 村山くみ・小関久恵・嘉村藍・志水幸(2006): 島嶼地域高齢者の主観的健康感の関連要因に関する研究. 東北福祉大学研究紀要, **30**, pp. 57-71.
- 村上尚三郎(1998): 第6章 学校教育における福祉教育の目標と内容. 村上尚三郎・阪野貢・原田正樹『福祉教育論』, 北大路書房, pp. 58-81.
- 山田知子(2000): 離島福祉における多機能空間としての「船」の活用効果—岡山県笠岡市デイサービス船「夢ウェル丸」の事例から. 比治山大学短期大学部紀要, (35), pp. 23-33.

参考資料 質問紙調査の項目

I. あなたご自身のことについておたずねします。(【問1】～【問3】)

【問1】あなたは何年生ですか。

1. 小学校^{しょうがっこう}____年生^{ねんせい} 2. 中学校^{ちゅうがっこう}____年生^{ねんせい}

【問2】あてはまる性別に ○ をつけてください。

1. 男性^{だんせい} 2. 女性^{じょせい}

【問3】住んでいる場所についてあてはまるほうに ○ をつけてください。

1. 粟島島内^{あわしまとうない} 2. 粟島島外^{あわしまとうがい}

II. お年寄りについてのお 考 えをおたずねします。(【問4】～【問7】)

【問4】お年寄りになるのは何さいからだと思いますか。あてはまるものに ○ をつけてください。

1. 50 さい ～ 59 さい
2. 60 さい ～ 64 さい
3. 65 さい ～ 69 さい
4. 70 さい ～ 74 さい
5. 75 さい ～ 79 さい
6. 80 さい以上^{いじょう}
7. わからない

【問5】今、お年寄りと一緒に暮らしていますか。

1. はい 2. いいえ

【問6】自分の家のおじいさんやおばあさんを含めて、お年寄りとのぐらい話していますか。

あてはまるものに ○ をつけてください。

1. あまり話^{はな}していない
2. 1 週 間^{しゅうかん}に1回ぐらい話^{かい}している ^{はな}
3. 1 週 間^{しゅうかん}に2回から4回話^{かい}している ^{かいはな}
4. 1 週 間^{しゅうかん}に5回から7回話^{かい}している ^{かいはな}
5. 1 週 間^{しゅうかん}に8回から10回話^{かい}している ^{かいはな}
6. よく話^{はな}しているので、回数^{かいすう}がかぞえられない

【問7】 ^{がっこう}学校で、^{としよ}お年寄りのことを^{べんきょう}勉強したことがありますか。

1. はい 2. いいえ

【問8】 ^{とい}あなたにとって、^{としよ}お年寄り ^{くわ}はどのような ^かイメージですか。できるだけ詳しく書いてください。

^{としよ}お年寄りは、